

縁を育み、命を生かす：

ルソーは教育論『エミール』にこう述べている。「人は生まれながらにして善である。社会がこれを悪くするのだ」と。また神戸大学教育学部教授、故・森信三先生は「教育とは流水に文字を書くようにはいかないものである。だが文字を岩壁に刻む様な真剣さで取り組まねばならぬ」と。人間は物心が付くまでは自分を形成していくことは出来ない。だから親や周囲の大人達が、人間に欠かせないものを身体で覚えさせていかなければいけません。これを【躰しづな】と言います。

根に水をやれば、どんどん茎が伸びていき花が咲くように、子供達もいずれは社会に貢献できる人間になってほしいと願うのが、世の親御さんの気持ちです。人間は「人の間」と書きます。自分1人で生きていると思いがちだけれども、本当は人の間にいて、様々な縁に支えられている。だから生きている以上は互いに支え合って生きていかなければいけ

ない。

かつて互いに支え合っていた家族や地域社会のよさを、もう1度見直す時期にきているのではないのでしょうか。人間は1人では生きられない。

縁を育むには感謝を形で表すことが大切です。ご縁とは自らに求める気持ちがあつて初めて結ばれるものだと思う。縁が人を互いに活かし続けていく。

「蒔かぬ種は生えぬ」と言うが、その種を自分の心でどう育てるかが、その人の人生を決めるのである。何かに懸命になっていると、おのずと縁は生まれるのではないのでしょうか。

生の喜びと死の悲しみを織りなしているのが人生というものだ。人間誰しも弱点は認めたくないけれど、やはりシツカリ認めて、それに対応していくことが人間の1番の進歩であり、大切な生き方だと思う。今の時代は特にそうですが、人の立場を考えなくなってきた。自分の側からだけ物事を見ているから問題が起こるわけですし、そこから1度脱して、自分を客観視して律していくか、いらないか…。これが大人と子供の違いだと思う。苦しみの原因は現在と過去の自分、他人と自分を比べることにある。「行き

先があつて、生き方が決まる」理想は行き先を、現実には生き方を決定する。これは目的と手段、戦略と戦術とも言い換えられるでしょう。戦略のない戦術は無意味であり、戦術のない戦略は空論に過ぎない。

いま自分に与えられているいくつもの縁とその忝なさに気付き、初めて真に縁を生かす事が出来るんだと思う。

宗教は戦争を起さない。科学技術もまた、それ自体が原爆を作り、人を殺すでもない。科学を使うのも宗教を普及するのも全て人間のしわざ。必要なのは戦争を起さない様、人間の心を教育することであり、私が僧侶だからつてわけではないが、それには「宗教心」が欠かせないものと私は思う。

「どう生きるか」と問う心こそ「宗教心」であり、それは「真の自己の発見」とも言い換えられるのではないか。「人生の目的は真の自己の発見であり、人格の完成である」と思う。そういうと「人格の完成はあり得るのですか？」なんて質問を頂きそうですが、人格の完成があるのか、ないのが大切なのではなく、そうありたいという気持ちの方が大切なのではないか。限りなきものを限りなく求め、限りなく努力する。

私達僧侶にとつても同じで、修行も人格の完成も限りなきものである。

「人生、いかに生くべきか」と問い、真の自己を求めて生きる、そんな宗教心を持った日本人が、より一層増えることを祈念しつつ…。

年の瀬を迎えた本年最後に、来年を見据えたメッセージとし、ご挨拶の言葉に代えさせて頂きます。

合掌 副住職 谷川 寛敬



